第３回

札幌市映像活用推進プラン
改定検討委員会　報告書

2021年8月10日㈫　15：00〜17：00
オンラインにて開催

次第

議事（施策の検討　他）

産業振興部長挨拶

出席者

（順不同、敬称略）

委員

吉田学園情報ビジネス専門学校校長	橋本　直樹
株式会社アレクト　開発本部　プロデューサー	成田　穣
株式会社北海道博報堂 統合プラニング局クリエイティブコンサルタント	長岡　晋一郎
ICC ディレクター・合同会社 tab 代表	カジタ　シノブ
一般財団法人さっぽろ産業振興財団 映像産業振興課国際展開チーフコーディネーター	李　嘉兒
札幌市立大学デザイン学部	工藤　真由

札幌市

経済観光局産業振興部長	坂井　智則
商業・経営支援担当課長	高橋　忠浩
クリエイティブ産業担当係長	山本　浩貴　/　事務局
クリエイティブ産業担当係	伊藤　実花　/　事務局

オブザーバー

株式会社アレクト　代表取締役社長	高津　創志

議事録

事務局

第２回目の議論を踏まえ、事務局から本日の審議事項について確認を行った。

人を育てる施策

カジタ副委員長

子どもの興味を引き出す施策に関しては先日ジャンルレスなのではといった話もしたが、あえて映画、CG といったジャンルを切るという方法よりは、広く映像を体験してもらう、知ってもらう、興味をもってもらうことで次の段階に進めるような入口づくりができればよいと思う。

李委員

海外との共同制作についてはそれぞれの知見を活かした映像制作が可能であることや、資金調達・配給などの面でメリットがあるが、文化庁や経済産業省でも助成金を出している。札幌市では商談会などを通じて市内事業者と海外とのネットワーク構築などを支援したい。

成田委員

学生へのインターンシップであるが、市外の学生からのニーズも十分あるのではないかと考えられる。現状、今年の新卒の半分は道外から採用しており、企業にとっても、優秀な人材を獲得するうえでは、全国が対象となり得ると思っている。

アレクトとしては、スキルアップのワークショップの枠組みを社内で議論し始めており、今後吉田学園さん含め、市外の学校関係の方々にも意見をいただきながら、考えていこうと思っている。

橋本委員長

前回、CG 業界に対して誤解されている親御さんもしくは高校の先生が多いという話をした。CG 分野に進む人材を増やすために正しい知識が伝わるような機会を創出したいと思っている。

行政には、デジタルエンターテインメント業界の職業を知るイベントに支援や協力を頂きたい。もしくは助成金や場所提供なども含めて、一緒に事業に取り組めたらと考えている。

長岡委員

動画広告の作り手への講座に関しては、技術系と企画系とに分けるのがよい。技術を学ぶ際、例えばスチールの人が使う機材とムービーの人が使う機材は共通になってきたりもしているので、テレビ業界やグラフィックデザイン、写真家などといった様々な経路から集まった方々がみんな一緒に学ぶことができると思う。

アマチュアの人でも技術を学びたい人と企画を学びたい人がいたり、プロの中でも企画はできるので技術を学びたい、技術があるので企画を学びたいといった場合があるかと思うので、両方を対象にしていいと思う。

カジタ副委員長

技術力がある人はそこそこいるという印象だが、企画力のほうは圧倒的に足りない印象があるため、そちらに興味をもつ人は多いと思う。

ただ、企画力が足りないという前提を認識していない人もいるかと思うので、そういうものを身に着けなければいけないと思わせるセミナーや講座があってもよいのではないか。

長岡委員

自分が技術と企画どちらを学ぶべきかわからない人もいるかもしれないので、それらがどんな効果を生むかを学ぶ概要的なものがあってもよいかと思う。

作り手側だけでなく、それを使うメーカー側にも参加してもらえるような形で、札幌の企業がこういう映像を作って、それでこんなふうに業績がよくなりましたみたいな成功例を示していけると、みんなが関係していけてよいと思う。

成田委員

映画・テレビではインディペンデント作品、広告分野ではコンテストなど、個人での挑戦を支援する枠組みがあるが、アニメ制作はシナリオから企画が立ち上がって完成するまで、個人で制作するととてつもない時間がかかるため、今の札幌市のたてつけだと、それを助成していくのは難しい。

コンテやジオラマモデルなどの個人表現に対する助成や、文化庁が行っている「あにめたまご」のような新人育成のためのプロジェクトに対しての助成なら考えられるかと思う。後者は新人育成のための企画に対して助成し、１

年間の助成期間が終わると著作権は製作者に返す仕組みになっており、その後、続編をつくったり、グッズ展開をしたりするのが可能となっている。

カジタ副委員長

補助金という形もひとつだが、奨学金制度のようなものはどうか。例えば、何らかの賞を取った時に、次回作を作るための予算やスタッフ集めの協力などはできないかと思う。

ビジネスを育てる施策

李委員

これまで海外の商談会においてコンテンツの販売やネットワークづくりを行ってきたが、商談会は発信と吸収の両面で非常に重要な場であるため、今後も必要な施策であると考える。ネットワークを構築して、海外の事業者と国際共同制作を行うことにより、ノウハウを学ぶこともできるし、海外から見た日本についての情報収集も行うことができる。

成田委員

アニメによる広告を制作したことはないが、スピーディーに作れるワークフローをつくって、広告にもアニメーションで貢献できる表現を考えたほうがいいと思っている。

産学官連携

橋本委員長

文科省の教育振興予算を使って、企業と学校、行政がどのように機能的に働いているか、地域で役立っているかの調査を実施したことがある。

本事業は北海道・札幌の学校、CG アニメーション企業、ゲーム企業、北海道モバイルコンテンツビジネス協議会、経済産業局、北海道庁、北海道総合通信局、札幌市などの行政にも入っていただき、主にゲーム分野と CG 分野の分科会にわかれて調査を行った。

福岡では市を窓口としてインターンシップを募集しており、市外からも学生が集まっていた。これは北海道、札幌でも、魅力的なインターンシップを行えば、全国から学生を集めることができるのではないかと思う。

また、福岡ではゲームコンテストも実施しており、日本ゲーム大賞の審査員もやっているような有名企業の社長が審査員を務めるなど、非常にうまく盛り上げている。札幌でも、今回のプラン見直しを機に、映画だけでなく CG にも取り組むということを PR できれば、多くの企業が参画してくれるのではないかと思う。

ブリティッシュコロンビア州政府に協力いただき、CG 分野での産官学連携（エコシステム）が実現されているバンクーバーに視察に行った。また、ケベック州政府にも協力いただき、ゲーム産業の集積都市となったモントリオールに視察に行った。どちらの都市もカナダ政府の国策として、当該産業の大手企業を誘致し、税制優遇や人件費補填を行うことで、本社機能の移転やスタジオ開設に至っている。これにより関係企業や学校も集まっておりクラスターを形成している。

産学官の連携も出来上がっていて、昼間に CG 会社や映画会社で働いている方々が、夜間や土日に自分の出身校に教えにいく。もちろん報酬は発生するが、自分の母校の子たちにこの業界に来てもらうという気概をもっている。海外はプロジェクト単位で企業に雇用されるので、日本の企業のような正社員制度では難しい部分もあると思う。

また、小さな企業が集まるだけでは成立しにくいという話もきいた。有名な作品が生まれ、企業が集まり、周辺産業が大きくなって、学校が増えて優秀な人材が輩出できるという循環になるのが理想である。

カジタ副委員長

人材の定着に関していうと、クリエイティブ分野以外のどのジャンルでも、よい人材ほど札幌からいなくなるという状況はある。スタートが企業誘致から始まるのか、どこから始まるのかという部分はあるかと思うが、産学官で連携した体制づくりなど、CG 以外の分野でも似たような状況をつくることは必要である。

工藤委員

インターンシップなど、学生と企業の接点については、あまり多くないと感じる。私は大学３年生のときに、CG アニメ企業にインターンシップにいった。映像分野はインターン生に求められる技術が高く、専門学生に比べ大学生は参加しづらい。

シビックプライド

長岡委員

最初から思っていたこととして、ＩＣＣとフィルムコミッション、札幌市映像活用推進プランというのがどういう関係性にあるのかよく分からなかった。また、フィルムコミッションは、フィルムというから映画向けの組織なのだろうという誤解をしていた。一般の人もきっとそう思うのではないか。そういったものをどうやったら解消できるかをシビックプライドという面から考えてみた。

シビックプライドの醸成には、存在を知ってもらうことが大事であり、そのためには映像活用推進プランの認知を広げ、事業そのものや理念、テーマ、コンセプトなどの抽象的な活動の総体に名前をつけるべきではないかと思う。札幌市映像活用推進プランあるいは札幌の映像文化そのものなど、大きな概念に名前があるといいのではないか。

フィルムコミッションが映画だけではなく、テレビドラマ、ドキュメント、CM、ネット動画、実写、アニメ、CG、もしかしたら静止画など全ての映像表現、ビジュアル表現を網羅するような受容性のある、そんな名称がよい。

仮で札幌グッドビジョンズという別称を考えた。ビジョンは視覚やビジュアルといった、映像のような意味と、これから先の考え方といった意味、二つを持っている。

ただ、これだけだと誤解が生まれては困るので、文章できちんと概要を説明するというものがブランドステートメントである。札幌グッドビジョンズ宣言として、作りたいのは映像文化ですという一言があって、札幌がなぜその映像作り、映像で魅力づくりするのかというときに、環境がそろっているからなのだということを皆さんに改めて理解していただくのがいいのではないかと思う

これらを一般の方々に認知してもらうために、マークやロゴなどを作っていって、その露出機会を増やすことで認知を広げていければよい。撮影中の看板や撮影スタッフに着用してもらうＴシャツ、撮影に協力してくれた施設・お店・エキストラの方々などに配布するステッカーなど、様々なところで露出していくような形を作れればよい。

市民の人たちに、このロゴの認知が進んでいって、積極的に協力しないまでも邪魔もしないというふうな状況がつくっていければ、そう思ってくれる時点で当事者と考えて差し支えないのではないか。

また、その札幌グッドビジョンズの概念に関して、大きくは企画する人と制作する技術系の人と、それから活用する人という三つに分かれていて、札幌市がプロデューサーとかコーディネーターのような形でこの３者をつないでいければよい。

札幌市や札幌市映像活用推進プランという部分がつなぐ人と考えたときに、ＩＣＣとフィルムコミッションの位置づけを考えてみたが、札幌市としてまとめて全部一緒でいいかなと思った。例えばそこをプロデューサーズ札幌みたいな新たな活動体みたいに回していってもいいのかなと思う。その大きな活動体の中に今ＩＣＣが担っているようなことだったり、フィルムコミッションが担っているようなことだったりというのが分科会的に下についていくような形の整理の仕方が分かりやすいのではないかと考えた。

橋本委員長

制作に協力することに邪魔しないということはとても大事であると思った。あとは、仲間になろうとするために、例えばＴシャツが欲しいなと思う気持ちだとか、ステッカーを貼ることによって、あの作品に取り上げられたんだというような気持ちに持っていくことは重要だと思う。

カジタ副委員長

ＩＣＣに２、３年ぐらい前から関わり出しているが、２０００年頃からある施設なのにここまで知られていないのかというのが衝撃であった。

そもそも知られていなければ、マッチングの機会だとかも生まれづらいという状況もあるため、ＩＣＣや札幌のクリエイティブを知ってもらうことに力を入れていかなければと思う。そういった活動をグッドビジョンズやプロデューサーズのような形で、まとめるとができるととてもいいな

と思う。

ICC やフィルムコミッション、それぞれが担っている部分が違うのは構わないが、外に対してばらばらで見せているという状況はプラスではないため、もっと塊として見せられれば、市民に認知されると同時に、道外に対しても知ってもらえる機会になると思う。

橋本委員長

シビックプライドを調べると、定義としては愛着をどれぐらい持っているか、あとは自分のまちにどれぐらい誇りを持っているのか、あとはこのまちで行われているものに対して共感を持っているとかというという三つの要素で計られるものとなっている。

シビックプライド醸成のあるべき姿を考えたときに、映像に関して市民が親しみや興味を持ってもらうこと、そのために市民が集いやすいコミュニティーが形成されていることかなと考えた。

あとは市外の方々に札幌への興味が喚起され、その方々からアクセスしてもらえることが重要かと思う。この点に関してはよくＳＮＳだというのが位置づけられるが、今回テーマに上がっている商業広告なども絡めることで、アクセスさせることは何かしらできるのではないか。映像に関して市民が関わりたい、グッドビジョンズの活動に自分も一役買いたいと思ってもらえることも重要である。

また、市民が経済的にメリットを感じることとして、企業が増えて雇用が創出されて業界が活性されることというのは、絶対条件に入ってくる。優良な作品が増えて、それに関わることが誇りと思い、映像に関する職業への興味喚起がされ、イベントなどもできるといい。

教育業界と産業界が将来像を共有して、そこに企業が投資、教育への協力することで、自分の会社にも恩恵があり、それを行政が支援することで活性化するのではないか。

札幌市の「シティプロモート戦略」や「スポーツ推進計画」にもシビックプライドという言葉が出てきてはいるが、成果として見えてない。

また、ICC とフィルムコミッションの話が出ていたが、同じ財団の中にあるので、組織改革をして、映像全般に関わる係のほうが管理して、一本化することでもっと動きがスムーズになって活性化するのかなと思う。

経済波及効果の面でいうとツーリズムの恩恵は大きい。恩恵を感じることで、もっと関わっていこう、映像作品に関連した商品を作ろうと思うのではないか。札幌市の企業が制作しているだけじゃなくて、札幌市が舞台になるものに何か助成をするなりして、シビックプライドの醸成につなげられれば良い。

成田委員

アニメ制作や映像制作に市民が参加しやすい場をどう作るかは作り手側としても意識していく必要があるなと思う。最近だとクラウドファンディングで出資をする個人などもいて、取り組みとしてすごく面白いと思う。

メイキングなど関わった人たちにフォーカスするようなコンテンツがあってもいいのかなとは思っているが、なかなか限られた制作予算の中でそこまで手を広げるというのは難しい。そういうところをフィルムコミッションにも助成する軸として評価してもらえると、市民が参加しやすく、かつそれ発信できるような場が作れると思っている。

李委員

これまでのフィルムコミッションの活動でもシビックプライドは重視しており、ボランティアエキストラの運用などを行ってきた。フィルムコミッションについて理解してくれる人も多くなってきたが、一から説明しなければならないことも多いため、ブランドステートメントがあれば、理念などを市民に伝えやすくなると思う。

閉会

事務局から挨拶をし、終了した。